

□書 評□

消化管内視鏡診断学大系 (4)

「胃-(2)胃潰瘍」

〔編集責任者〕 岡 部 治 弥 北里大学教授

鹿児島大学名誉教授 鹿児島通信病院長

佐 藤 八 郎

今日広く普及発達した内視鏡診断技術の水準と成果を集成した“消化管内視鏡診断学大系”の中の第4巻「胃-(2)胃潰瘍」が刊行された。

胃潰瘍を含め胃疾患の診断学の近年における急速な進歩、発展は刮目すべきものがある。

日本の消化管内視鏡診断の進歩が、世界のトップレベルにあることは、われわれの誇りであるが、これを支えたものは日本のX線診断学、病理診断学の進歩に負うところが大きい。また、これらの研究者ならびに内視鏡製造技術者の理解と協力によるものであることは論をまたない。

胃潰瘍の内視鏡診断に関する著書は今までも数多く出版されてきた。正直なところ、既版のこれらの著書に対して、岡部治弥教授を中心とする編集委員各位が、従来の成書の枠にとらわれず、いかに特色のある編集記述をされるか、本を手にするまで期待と興味を持っていた。ま

ず気づいたことは、本書がただ単に胃潰瘍の内視鏡診断だけにとどまらず、内視鏡を応用して、胃潰瘍の病態生理に一步でも近づき、その全貌の一部でも描き出そうと努力され記述されたことに敬意を表したい。

最近、われわれは胃潰瘍の診断は比較的容易になったという錯覚に落ち入っていると思う。胃潰瘍の90%は確実に診断できるといわれるが、Ⅲ型早期胃癌の鑑別は現在でも不可能に近いし、仮りに胃生検、細胞診などの内視鏡的補助手段を借りて癌との鑑別ができたとしても、手術の必要があるのか、外来治療でいいのか、抗潰瘍剤の選択はどうか、再発・再燃の恐れはないか、出血・穿孔などの合併症の危険はどうかといった、さまざまなわかりきったような質問に対しても、われわれは明快な回答ができない面が多い。これらの率直な質問にも留意され、胃潰瘍のstatic dな所見の解説以外に、胃潰瘍の経過観察といった aynamicな面

での解説も豊富に盛り込んで記述してあるのもありがたい。

多発性潰瘍、線状潰瘍、吻合部潰瘍、難治性潰瘍、急性潰瘍などに関しても、それぞれX線、内視鏡、病理所見などを組み合わせわかりやすく書かれている。

特に最近その増加が話題になっている若年者および老年者の胃潰瘍の特徴、もっと大切な胃癌との鑑別点についても紹介がなされている。

各項毎に病態生理に関する記述もされており、この一冊で胃潰瘍診断学のほとんどが網羅されているとい

ってよいだろう。自験例を中心にした記述は読者を引きつけ、座右の書として申し分ない。

先般メキシコの世界消化器病学会に出席された多くの方が気づかれたと思うが、諸外国でも本邦の内視鏡器具を使用して猛烈な追試が行なわれ、一部では日本を凌駕するような成績が発表された。今後本書で強調されたように、内視鏡の技術をただ単に診断面にだけ応用するのではなく、病態生理の把握に役立つ研究の手段としての活用に留意していきたいという著者らの提言に賛意を表したい。

B 5 頁260 図45 写真98
原色図228 ￥29,000 ㄱ300
医学書院刊